郷通里初編　下

へ13
3012
3

中幕遊仙奇遇

錦の里巻之三

江戸　為永春水著

第五回

唄「〽とりやア風雅で放埒なものが昔は流行ましたんで今の人は姿が意気でも心が野暮だから権酒落たことをいふ香が引く捨て仕舞うからいろ粋人下掛み入て笑て弄る

〽世界はみなどのへんなかなとおもしまされ

3012
3

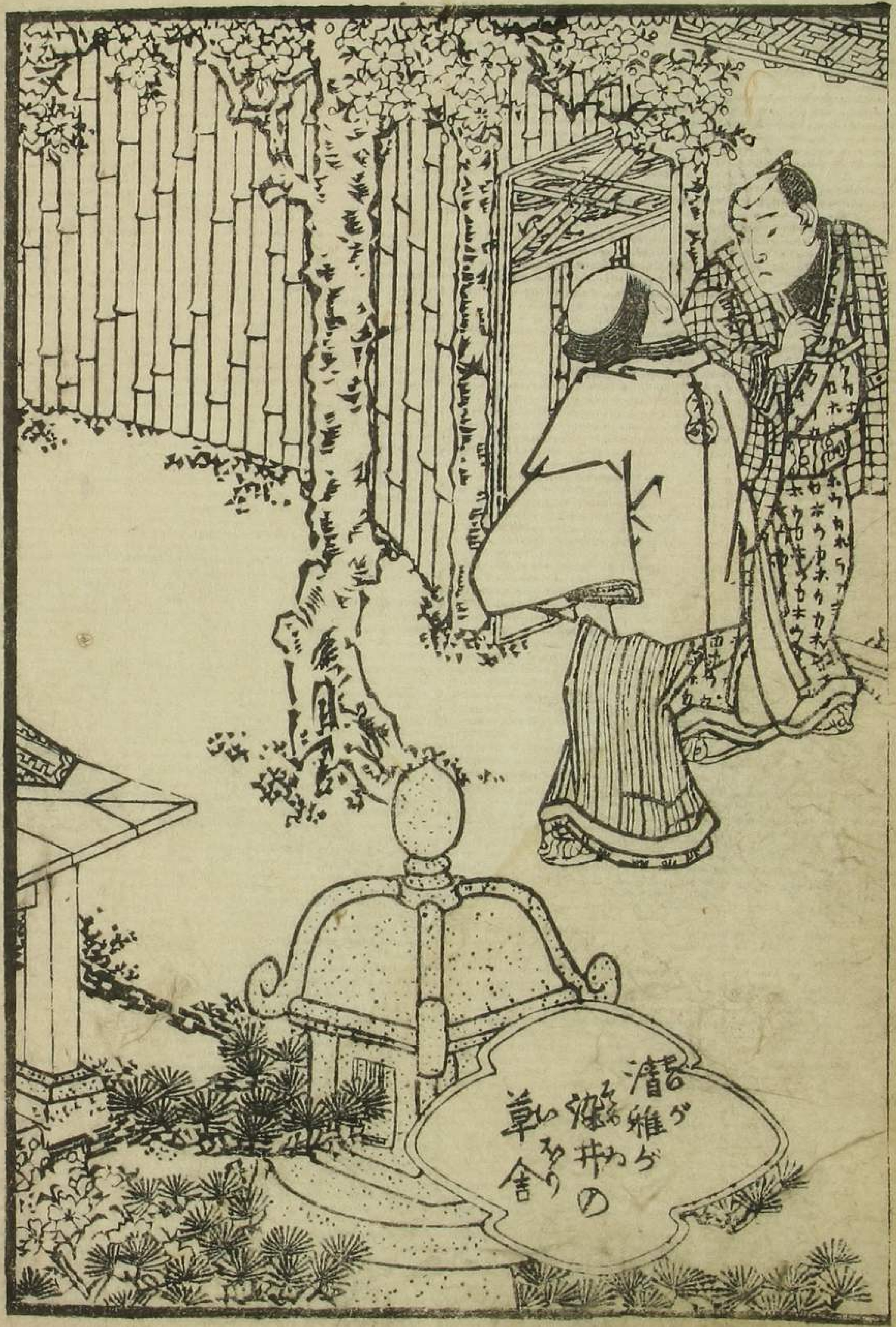
昭和九年
七月九日

せうろおめでる身の縁起住所さへあく〳〵も好の
海辺と紛ごし逢坂山けくこそ是非なけれ足段
せかお猫く七兵ゑるものがたりにつひもの
変るての世がと続たりし。そまへ山里つとあくハ
いろ〳〵の妻に大江山引先く井の向先し。なよしれ
刀ら枠も。今ハ昼身にむかうとき。あんさ紛しき
おそろしき是も是とるにいあやむ　下界也
大へモウようしませうヨ　美へそまおやア何ぞ他の柳みを燃ナ

吉へアヽ何程しても当世の女の方が勝れへ　清へ一さく
らんざ面白うござりやす　何程しても手強な古ひ女の
せゐつく居るとぞへ滅多に少しばかり娘でござりの縁
古風ではないと古狂いと思ひいと　一妻出たり歌仙のうぶひもの辺
あんぞとりより所へ随分婀娜な芸が有てかるト　いよ
おもしろく行の戸谷わしくとおもてききるがら　一「清雅ありく
毛ほどまで寝てお主で手拭のすへト　呼ようで清雅八月ろまうつき
ガ身をくつくせバ子が鉢屋に気持を返せし　枕元障子の外より〜ろ

清「イヤもまこく丸日の座しき中までさしこむありさま
御前のいう様へ今までの不残篤のなさん「清雅
さんく歩く藤兄承来らうつとさく出り路をしく
さそひふ来さ歩く宅にて藤由兄めさらうが
高遊の好男ごろうさ俗子藤兄由志あせ人よりの人
の数あらく呼ぶる女人ふ嬢衣のまふふく障子をあげる
元来西戸ハ又ぎよゑ清へ唯今その木戸袖すとく
上の方へおあげると直にめやれトいふ袖まよ来る

人々木戸押開き入来る清雅の友達ゑつきと
もお互のある息子様ちつくしき姪を二三人まそひ
同じ娘郷ある藝者袖二人連彼是八九人中でぞ
ろくと嬶達へちるる女人まずづの清雅由ちらたへ
てきるの袖行列ありう清「歩くどまさ西方へむ
上んあせへト座下離きて井戸端へ彰袖まさふ
名出しめく△「サア旅人さんア此方宿で足袋お納め
あせへ●「開清で陸かりの■「おた様サおらし済くッく


潛雅が
縦井の
草舎

逆通しては、かへつて悪いぜ。●へ十分忘られてゐると
云ければこそ、雑の文■へ廣富が清雅さんざくざく若紀ざいけれ
ども下の字が一字違つて清玄で又有る廿人大徳ござりへ
云ふもそうだと今日は採姫が浪山に來てから清玄も
圓らぬ様になりしてまおくまでがらう乃ちげへ桜へ比方が
御曹子にあつてお琴さん、折琴姫みえて一世一大狂言を
せりた人なり■へ宗玄に有りてがあるめへ▲へ左様ヨ為ふ宗

玄の字が上下あつて玄宗帝の役でお花さんを揚貴
妃にするのは、大勢あるが中で歌妓の中ではみんなを
役不足だらうの連中だぜ 参へそりやアお花さんを揚貴
妃の中では家業が違つてきやさぞ宜からう 桜へなにやア
桜へ見ては、玄宗の揚貴妃よりは、お花さんの
方が気が強く、お前のおもしろいまする。○げいしや花 へまへ お前
さんがきいたらお世辞におまへ、お前おんでござりますへ

琴「イヱあのゑんとうでございますヨ先刻から途中お
まへさんの御父さんが見えながら此所まで参りました子へ
お富さんに左様でございますね　富「ア左様でございますよ
まヨトあの娘子達ハいづれも藝者お花の弟子に
て素人にハ自然と心やすく息子連中も多く
心易すけれバ一通りの素人に仕立てられるおく
町内にハおかみさん達も届けるのあると弟子もしまさ相

し
手の藝者ハお柳お花の姉ぶん是も此程お弟子に
まなびひまず新子なりと素人ハ此節流行の清元ハ浄瑠璃
の様子を見てまた外ハ火鉢へ寄りそひ居り　清「サアく
早く〳〵お師匠さんの火が出まして今迄よ其外が出
来ませぬ。アリ大きに御機嫌よろしく存じ　お前達も
大かたにおさらひ出かけて来さつし子ト此藝者お花ハ
まず座敷の内坐りて居りしが此座の亭主が来

の方よりかへりし紙使者が入へ来りて手紙を出して 直「イ
今日ハ存ぜずにト言て清雅の息子見て 花「コレ若ミ君
ハ亭さんでござりますぜ子 清「テモお前ハ若さんどつけ
子ト呆れて手紙見つめる 花「是ハ久しくお目にかかり
ませんさて今この座敷へ来りまして途中で雅(?)
さんのお名を紙面に清雅さんとおり お近さんハ
まうろうきみとハ若ぐまじきなんぞ 清「夫れハ道ふア

不思議なるご夢のさめさめのう今が夢か行程しよう
どうう 花「何がふしぎで私入るまま「ト一生不思を
合しくかる連の息子とハ他の娘とどめと行や
ち雅ひきついで居る息が行も清雅お花ハ夫婦
とめふりつぶうしき手紙しても居る
作者曰清雅がお花の手紙見ておどろき
呆れてかくハいかなるやとまた一二の巻にあらし

亭主の中の世話ずきく今亭主がさめると
速みその世わ好が藝者になりくさい迎ひ来る
内家にいまだ見えきらぬ眠り也お清ハ老人
てらかびひ迷ふハ料理なりぞと案じぬく
生き藝者お花が清雅をよんでおどろきし
いいかる叔ぞ手らねむき次の座敷へ
知るべしまだ清雅の二人ぞ正義なりしずや

それても理解しがたくハお花と清雅の愚痴ぶ
法よ説くなくもらしく探返しのハおのれから
三手子細を合ぬわろんろ
此直かみて清雅が起こし背戸の方より茶せてし
らくく持来る 清「サア お茶が出来まする 亭人がおそを
手前まし ト 菓子箱の引出しを捻出して あるべくく
おきさ 清「サア 何もござんせうハ出来ぬ人 黄な粉で お菓

子でも御上りなさいまし　〽これハめづらしくト各〻
茶の香で仕まひ　客〽せい雅さん今日ハ文情で今
ぐらゐ御出かけなされ　やしても無いもので一句もなし　清〽
おめへア宮二三日花の見で家中に殺て居るやうだ
客〽さうでもあるめへが此屋の好身ずつと世説御座
なせへ　殊ニ今日ハ其てあの紙表紙附ニ掛つて
来たのニお前も此咄の筈じや其蛟さんを連

来たらう義理でも御座りませんぜ　花〽サア旦那元人さんが
折角おさそひなさいましたうへ是非とも御供いたし花の
まさ見さしよ御座いそ御遠慮ますヨ　清〽ハイ〳〵左様ならバお
供致しませう　客〽其代りニ扇屋でお前の好き
ますよ御馳走をいたし升夫から又ぐるりと廻つて扇袋
そ御連中もいつね田甫左右もなりも桃採清雅ハ
お花の先みさき後ニなりつゝ此間をいそがわしさ

継と看なれバ墓にもよく似たる松花のその墓
荒る墓の梅しも紋他人ハ見ましね拙も又同じ
思ひ此ありぞとハ知まずど折良清雅の鬼を他に
隠して見する松花なのハいまだ知ども おのづから物かたる風
情の形ハまたく さすがに夜個の老女も連の人もなく
きまりてばし此所よ彼処と咲むにうかれ笑む
の隊荘子の墓を思ひ出る跡路あぜ石諸菜にるさ

とらむの娘さちハ先へ歩みんで我々にも
「橘が見なへバ探がまぬく風のまゝにさそ
らびれ手を引そめて海生山流くらむ花
の帆ぎくへのハ章俗にも山路
気候に探び我もまたく瀬の川ぞ着にけり

第六回

新て清雅の瀧井より瀬の川材まで往来の花の

あめが下京とよし野の花の咲くらんね来婦も
まことに雅なる風流と悦び雅俗の友の寄つどひ
こゝに名だゝる玄宗の名木名所おほかる揚巻
桜の下に遊座まうけ酒宴が途中より
王子の里なりける扇屋へ使を走らせ丁度此所へ
よび寄せて彼お花お新をはじめ三に人の娘ともに
唄ひつゝ弾つゝ舞ぶそのありさまを清雅が心

につくづくみ正しく芸の遊はりにきぶく集りくる
娘の色も多くは芸にすぐる娘の風俗もいとゞ
お花の姿が芸にすぐる娘子をしらん玄やの
出来よく有る女人とも謡の外ぞ人々
多く仙境の飲食をこえし荘垣の如くおもひしに
是ほどまで遊ども玄宗の様々別荘にやどりまた
みなりけん実にけりくまりへお花の艶を続なく

うるはしく御国恵のひろく義政の風雅の由縁とて
嫌ひ玉ひしかれども多年御国の間にその
むかし茶の湯をかけてよまするなかりしが世もつくに
遠ざかりてきびつきにて名の広まりしを丁寧より此
出し是も角も後日に再会すきんよしを約束して
其日は終日茶事碑酒に具して此人家路を帰り
ける実や人の心の定めがたきはむかしよりいふ所なるに

して珍らしがれるにあつまりとりつけ土地の人数
まづは先は半銭賢愚の道理を弁へず是なる者よ
ひとく溺るるもの多く好で危ふき事を楽しむがごとし
きまへ昨日今日まで世俗のかましきと嫌ひ佛門の
徒となりてるものあらざれども清雅は壮年人にも
似ず他人男女嫌ひと唱へされて深井の里に閑
居せし身なれども彼揚羊肥揚の茶事好みてより

あやしくもお花と菱のちぎりうかべての後に正
妻となりぬる花扇の座敷は今は萬情すぐ
此ことに移りし久しく花は捨てありし古今の葉花が
悉しくかりし深井の隠居所を立出今身は我
〆し米町の本家に来り此又月上旬で遊も抜び
岩お花の様子を伺ふ所ふそもく昔花と俵
稽古の師匠なるを歩し花よりつゞくしいのと

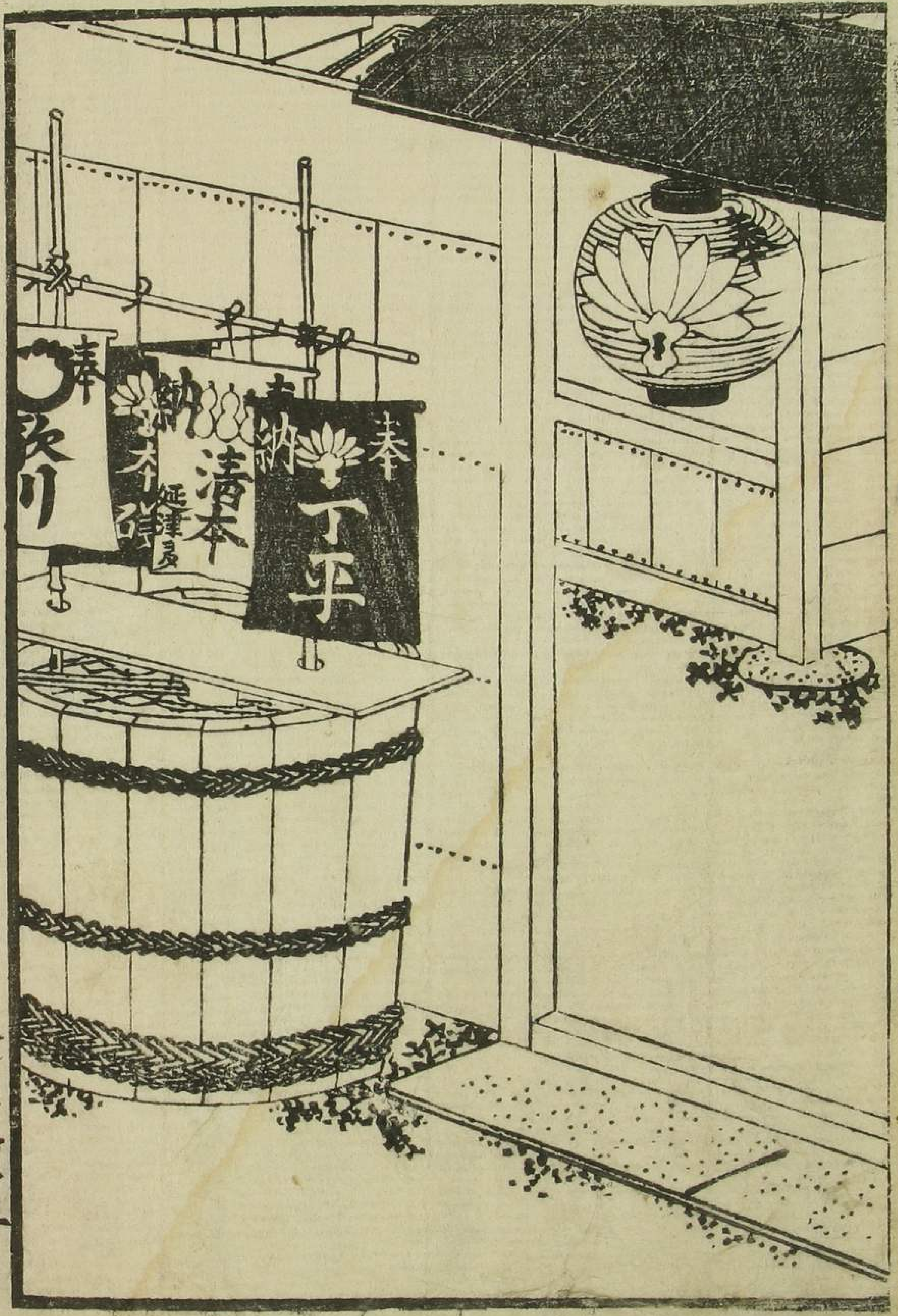
物堅く男嫌ひの行状他人に知られて小町娘と
評判を請るものが座敷に勤むるならねば武
家町方の隔なく心かきの貴人多くして聴より
家内に居ること稀なり此ゆゑに清雅も歎なく
留守へのこゝろづかひ行届きまさ武家方書院けまさば
今宵ハ奥座敷にあらで専ら信心ある今比羅
主人は縁日々まで唯一人参詣せしと後ろの老が

いふ紋所まで幸ひのよなりと直にそれより
縁日の佐源治へておのむけがあぢらく手まし
夜半の縁ひ好む所に気をつけてりいまへバせん
後も右たりもよろの衛に色の往来所の誰か
あらく様どもみてや ちぎりの此縁日 男「エコウ 此方も
芳町さんに吹くが お花さんの吉さんで大そうに貴て
寝るそうごウ あるれど 吉さん此方より気が利く

寝るかうしぞ 今おやの後悔ごらう 女「なんでも芸
なる人の気も知らで なんぞといふと吉ざんのこと
をおいひだが私きやア 親に御勘当 されても吉さん
の女房になりたいよの紋 絵馬あれへ来へヨカ
とへキウ 友さんとまいの 御母さんが殺せまても御母さん
がくやしがいくも 喜多と弟といふ名紋所も承ぐに 男「ド」
否の いやで あいろちよつとおくれえ 直ら 女「アアレサ マア

しつかりと御らうの狂言(きやうげん)をして私(わちき)もいつそのこと手(て)にお前(まへ)
と二人(ふたり)で田舎(ゐなか)へでも往(いつ)ておやアまいろ湯治場(たうぢば)とかよく
でもいつそく芸者(げいしや)でもしようがおやアあいかう子 男「大(だい)そうき
はやいとこ親いつよのサアと云(いつ)て御免(ごめん)なせへといふぐらう
女「おまへとそ踏切(ふんぎり)が能(よく)つていけやアしねへ 男「そりやア
いふが夫未利(よろもん)になるせまかしへまさ此度(こんぎ)は来てチツト了
妹(いもと)ならねへナ 女「アレサ おまへ六(ろく)ら 御どんとよりちやアあいヨ 男「

ねどう行くコレわらア吉(きち)さんがやつてくつていやすサ 女「吉(きち)
さん御免(ごめん)なさいまし 私(わちき)のおつかさんへ吉(きち)さんがいくと思(おも)
ふく悲(かな)しけれども私(わちき)やアモウ吉(きち)さんの母(おつかあ)でもおよツ
さんでも誠(まこと)にいやでござい嫌(きら)ツてしまつて野暮(やぼ)でござりやす
し私へかんとうの伯父(おぢ)さんだけれども チツトおよツさんと
いふのハ厭(いや)でござい 男「なぜ其様(そんな)に云ふくいふのが 女「ろんの
金(かね)がわるいと云(いつ)ていつく私へ何やかやおこるのさ お末(まゝ)さんハ



吉さんは京に隠居さまでゐけれど内所でお嫁さんの
親父さんが金子出しなく両替銭のとしくとりなと
どのよ吉さん両替やア一文も出さないといふなごろ
そのまゝぐ知れるとおのぢアア子ゝ其様なの銭もつこと
よしく一生親父さん母さんとりよのはいりやぶれ
あるまいか其の席ゝ其様な人を親が何てのけ
やアしないよ

男「そりやまた其様だ吉さんが男

親の猪子がごうぎうしても粗末にさせまいが
の中 女「そりや御覧な猪子の女房になりやア私も
猪子のさりあつちものさせまる八子香をとりな
〳〵ト鰻やの前へんで居る焼火のかばやく
通りハ魚を隠をせうみしく行るさまびまさ
此方より二十八九の大島田の娘茶の裾より
ものゝ云ふ茶ぶ縁のひわどけなく出たらさんらしき

人とともに付て手を引きて行くむかふよりして
来る三十四五の年増目コ眉毛うすく連乃
男に何やら恨みを云ひながら歩行魚のうろつく
しき亦十五六のかたちあいらしき娘が出茶屋の前に
目配せして 娘「いつぞやはお世話でア情人と同伴
よ歩行ましてと大屋さまがそこで取ちまうさ人談
ウア後から付て来やアがまたト群集の中を押

分ゆく此方のかくれて二十才ばかりの娘乃人
不に化粧しげ四十才ばかりの旦那らしき人ふ
向ひ　娘「アレサおよしなましヨ其よふなん気の毒な
らバ姪ござゐますが每夜の宅へお侍あそばす
ますと亦お前さんが彼方へ出るくお仕まひな
さいますのヲト擁本紙笑那ふして何とか
ま縁ぶる可得ありべし　清雅ハ其る光の渡紙

追々縁日の人込ハ彼方此方と尋ねる中ふ美人の
後ろ姿なく情人同志が行ある恋路の寄もある
ろきもまけて今宵ハ目うつりして其是ろと行
庚申をさて終わぐてえ悪所拵しも代ふ人多さハ広しく
群集の系　皆八方へワヤくと逃るわりさるうろく
まんくく倍まるあれバ溝へ才まりて淫女目もあてるまね支
そうどうハ何る中るんと清雅もおどろき通るふも人込在ば

却て怪我もなかりしと植木ハ木立に首ハ斤斧あり
けるに又往来の人ふむかくまて通来る者の後の方より大男
仁の書根ゟ走る孫どもまよ引提ヶ白刃の光り出る絶
目がけて追手は既に二足三足とあわやと看る其絶
も植木につまづき前の方へ倒れる所を妻女とあびせを
ゐる白刃の稲妻は方に倒ふ彼清雅もハツト驚く
まづく中や側にありける植木の中の桜の大木ドサアリト倒るゝ

勢ひすさまじく脊を打る大男は倒れまろびけるにあくる
ごとく落ち二ツ三ツ根へうち倒もとの櫟木のお屋かそ必死を逃
るゝ其所がまゝ十四五と見え出せしが是ぞ小女の踊きつゝ
再度よみ直して気は乞したる風情なる中より清雅が白刃
砂飛ばす手つるもあらざる中へ肩より引かけ背負ながらくら
ケりさしく逃出しあやしき難を逃れける
走りより其を清雅の二人が花笠を腕をされて

東の浮名の婀娜ものがたり粋士の意気より六の巻
まで後編とハ申せども何も續て出板いたし

芳薫交話
丁子風呂
全三冊

浮世風呂ハ當世にうつくる
新著ハ古今稀代の人情にて
教訓ハ其實ぞ あつさの愛し
為永春水作

金龍山人狂訓亭為永春水作

東都 独立齋 歌川景松画

錦の里巻之三 終